

<サロン9条>第296回例会 7月4日(火)

テーマ 「国民無視の傲慢な安倍政権を映像DVDで振り返る」

話題提供：吉田 隆さん(「岐阜・九条の会」事務局員)

* 参加者 15名

今回は、日頃から映像情報を収集・駆使している当会の吉田 隆さんが、この間の安倍政権による傲慢な政権運営を63分にわたる映像から読み解く場を提供しました。

DVDが始まると、①南スーダン問題(自衛隊撤収 閣議決定をうけて—日本国際ボランティアセンター代表理事 谷山博史さんインタビュー)②加計学園問題(前川前文科省事務次官の会見)③共謀罪問題(TBS報道特集)④安倍首相9条自衛隊明記発言問題(民進党・長妻氏への国会答弁)⑤ファシズム初期症候(チャップリン「独裁者」より)、以上5本からなる普段ではあまり目に出来ない映像が次々に飛び込んできました。

①の南スーダン問題の映像では、谷山さんが、「憲法上の制約から事実を直視できない」ことや「PKO五原則はあくまで武力の紛争当事者にならないための基準」なのに、「安保法制による自衛隊新任務の実績づくりに眼目があった」ことなどを話されました。②の加計学園問題では、「前川氏が当事者として疑問を感じていた」ことや、映像の補足資料として配布された「前川氏の日本記者クラブでの会見」の中で、「国家公務員は滅私奉公ではなく、一人ひとり尊厳ある個人であり、信念や思想信条は自分自身のもので持っていなければいけない。そして、全体の奉仕者である一方で、主権者である国民の一人でもある。その立場で、おかしいことはおかしいと何らかの形で伝えていくべき」との発言が紹介されました。

続いて、③共謀罪問題では、元アメリカ国家安全保障局(NSA)局員のスノーデン氏が、「米国では先行する反テロ愛国法により、制定時に疑念があった、国民を対象とした情報収集が行われていた」という発言や、金沢市の主婦が提起した「コッカイオンドク運動」、「現内閣の立法府不要論」、「市民同士による安上がりの市民監視」などの声が紹介されました。④首相の9条自衛隊明記問題での国会答弁では、「一貫して総裁として以外の説明をしない」ことや「長妻質問での委員長注意」などが目を引きました。⑤ファシズム初期症候では、チャップリンがヒトラーの独裁政治を批判した映画「独裁者」の有名な最後の演説、等々が次々に映し出されました。

その後の、参加者による話し合いでは、日常のマスコミ報道では伝わってこない事実を主権者として掴むことの必要性から、コッカイオンドク運動やカイケン(会見)オンドク運動に広がりが見られることや真実を見抜く眼、特に若者層では新聞やニュース離れによる真実との距離が感じられるため、真実を知らせる試みの大切さが強調されました。

さらに話題は、7月2日投開票の東京都議選の結果に集中し、秋葉原での総理演説時の批判的な模様は安倍政権の凋落を感じさせるもので、政権の合理性にも欠けることから、粘り強い運動の必要性を改めて感じるとの意見。安保法制強行後にも支持率を持ち直した経験から政権は高を括っていたが、国民は忘れるものとなってはいけないとの意見。現在の政治に代わる展望があれば結果が大きく動き、9条運動に対するつながりが生まれてくる可能性を感じるなど、意見が相次ぎました。

また、サロン初参加の方からは、「安倍政権の本質がテレビの池上 彰番組で分かったような気がして、大戦を挟んでも日本だけに特有の潮流があるものと考えられ、憲法をもとに次の世代につないでいくことが大切」との意見がありました。

今回の話題提供では、映像という解り易さと場面の真実性がことの解説力、説得力をいかに増すこととなるかを感じさせるものとなり、メディアの奮闘、再起を願わずにはられません。